



各国の糖尿病診療の現状を パビリオン形式で示す

第18回国際糖尿病連合会議(International
Diabetes Federation Congress)
(パリ, 2003年8月24~29日)

野田 光彦

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

と萩原朔太郎が詠んだのは、今から約70年前のことである。現代では約半日の飛行により東京からパリへと到着することを思えば、今昔の感がある。目的地パリに到着してみると、猛暑の報道が流れていた割にはピークは過ぎており、むしろ東京より過ごしやすいくらいであった。3年に一度行われる国際糖尿病連合会議(IDF)は、その第18回の会合がパリで開催され、会場のPalais des congrèsには8月24日から29日までの6日間にわたって多くの参加者が集まった。各シンポジウムや約300の口演をはじめ、1,000にも及ぶポスター発表など、さまざまな催しが行われ、基礎・臨床の分野で熱心な議論が繰り広げられたのである。参加者は予想を超えて多かったようで、筆者はプログラム初日の25日の午前にレジストレーションに出向いたにもかかわらず、学会用に準備されたongres・バッグはすでに品切れとなっていた(ついでに言えば、プログラムブックは重い割には、他の国際学会のものに比べても使い勝手が悪かった)。学会場は比較的にこじんまりとしており、ポスターは1日ごとに張り替える方式であった。

今大会を開催するに当たり、IDFは、同学会が特に力を入れていくことがらとして四つの“キーマッセージ”を提示した。すなわち、1)すべての国・地域の患者が必要にして十分なインスリンを使えるように体制を整える、2)開発段階にある人工膵島を早期に実用化する、3)2型糖尿病の原因遺伝子の探求を進める、4)運動を積極的に推進し、生活様式の改善によって2型糖尿病の発症予防に努める、である。

会議はヨーロッパでの糖尿病関係の学会に往々特徴的なように、病型のうえでは1型糖尿病に、

組織(臓器)の面ではどちらかといえば膵島に、相対的な比重が置かれた会合であったように思われた。基礎の分野では、筆者は主に膵島に関連するセッションを聴いたが、再生医療など比較的応用的な方面への意識を感じさせる発表が多かったように思う。臨床の分野では、インスリン・アナログを含む新しい治療法やインスリン抵抗性改善薬などに関する発表が多くみられた。わが国からも、ノックアウトマウスを用いた研究など、ハイレベルな研究発表が多く呈示された。また、いわゆる“うつ”など、気分障害の分子機構も明らかになりつつある現在、いわゆる mood(気分)とスタチン系薬剤(J Am Coll Cardiol 8月20日号参照)やインスリン抵抗性改善薬などとの関係も、基礎と臨床を結ぶ研究として、意外な発展を遂げる可能性があるだろう。糖尿病にときにみられる食欲異常や摂食障害も、今後は、より分子的な側面から検討されていくのではなかろうかと思った。

会場は言うまでもなく国際色豊かであり、特に、各国の糖尿病診療の現状を、いわばパビリオン形式で示すというIDFならではの試みが、国別にブースを用いて行われ、日本のブースでは食品交換表の英訳が呈示されていた。また、地域別の発表は、通常のセッションの口演プログラムにも組み込まれ、行われていた。

パリでは世界陸上が開催されていたが、学会場を出れば、パリ市街にそのざわめきは感じられず、しかし世界中から観光客は集まっていた。私自身、セーヌ川の回遊やモンマルトルはサクレ・クール寺院への探訪により、一瞬とはいえ「忙中閑あり」のときを過ごすことができたのは、多事に忙殺されがちなわが身にとって、ささやかな、しかしこの上ない幸福であったように思われる。最後に、お忙しい中、モンマルトルへいざなって下さいました、英語と同様フランス語にも極めて堪能なわが同門の先輩、虎の門病院 内分泌代謝科部長の小田原雅人先生に心より深謝いたします。M

のだ みつひこ

朝日生命糖尿病研究所 主任研究員
(〒100-0005 千代田区丸の内1-6-1)